

# 法門寺の埋納物に記された僧の出自とその経歴について

岩 崎 日出男

## はじめに

法門寺とその地下宮殿に埋納された数々の密教遺物については、一九八七年四月の発見以後、まず中国の研究者によって研究が進められ、その研究の成果が公表されるにともなって日本の研究者の間にも法門寺の密教埋納物に対する研究が行われ、近年その研究の成果も多数公表されるようになってきた。ことに一九九八年十月には、中国から呉立民・韓金科両氏の共著による『法門寺地宮唐密曼荼羅之研究』（中国仏教文化出版有限公司）が刊行され、この書によって数多くの鮮明な密教遺物の写真が掲載され、それとともに法門寺に埋納された密教遺物のほぼ全体が一目で俯瞰できるようになったことから、法門寺に対する密教学（インド・中国・日本における歴史・教理・図像）上の興味は徐々に高まりつつある。

この小稿では、これまでの法門寺埋納物の研究において考察されていない、埋納物に記された僧の出自や法流についてでき得る限り調査・考察し、唐代仏教及び密教の最後尾の状況の一端を明らかにしようとするのが目的である。

## 法門寺埋納物に記された僧名

その数二千点とも言われる法門寺埋納物のなかで、僧名が記されているものには「大唐咸通啓送岐陽真身誌文」（以下、真身誌文と略）、「監送真身使應從重真身供養道具及恩賜金銀器物寶函並新恩賜到金銀寶器衣物等如後」（以下、物帳碑と略）の二つの石刻板と、「塗金単輪六環銅錫杖」・「銀函」・「金函」・「真身宝函」の以上六点の埋納物が確認される。（なお、以上の埋納物の名称並びに略称等、及び以下に引用の刻文は『法門寺地宮唐密曼荼羅之研究』の用例と掲載の翻刻資料・四二～四八頁及び一三四頁・四二八頁・四三五～四三六頁に従った）

まず、「真身誌文」に記された僧名であるが

内殿首座左右街浄光大師賜紫沙門臣僧澈撰・内講論賜紫沙門臣令真書。……縁謝而隱、感兆斯來、乃有九龍山禪僧師益貢章聞於先朝、乞結壇於塔下、果獲金骨、潛符聖心。……十四年三月廿二日、詔供奉官李奉建・高品彭延魯・庫家齊詢敬・承旨萬魯文与左右街僧録清瀾・彦楚・首座僧澈・惟應・大師重謙・雲顥・慧暉等同嚴香火、虔請真身。……爰發使臣、虔送真身。乃詔東頭高品孫克政。……内養馮全璋與左右街僧録清瀾・彦楚・首座僧澈・惟應・大師清簡・雲顥・惠暉・可孚・懷敬・從建・文楚・文會・大德令真・志柔等、以十二月十九日自京都護送真身來本寺。□□□□、嚴奉香燈。雲飄寶界之花、泣散提河之淚。以十五年正月四日、歸安于塔下之石室。

とあり、重複する僧名を除けば、僧澈・令真・師益・清瀾・彦楚・惟應・重謙・雲顥・慧暉・清簡・可孚・懷敬・從建・文楚・文會・志柔の一六名の名が記されている。

「物帳碑」では

銀金花菩薩一軀并珍珠裝共重五十兩并銀稜函盛銀鑲子二具共重一兩僧澄依施、……銀如意一枚重九兩四錢袈裟一副四事已上尼弘照施、銀金塗盃一枚重卅一兩僧智英施、銀如意一枚重廿兩手爐一枚重十二兩二分衣一副三事已上尼明肅施、……右件金銀寶器衣物道具等并真身、……左右街僧録清瀾・彦楚・首座僧澈・惟應・大師清簡・雲顥・惠暉・可孚・懷敬・從建・文楚・文會・師

益・令真・志柔及監寺高品張敬全、當寺三綱義方・敬能・從諲、主持真身院及隧道宗爽・清本・敬舒等一同點驗安置於塔下石道内訖。其石記於鹿項内安置、咸通十五年正月四日謹記。金函一重廿八兩銀函一重五十兩、・・・已上遍覺大師智慧輪施。中天竺沙門僧伽提和迎送真身到此、蒙恩賜紫歸本國。興善寺僧覺支書。

とあり、澄依・弘照(尼)・智英・明肅(尼)・清瀾・彦楚・僧澈・惟應・清簡・雲顥・惠暉・可孚・懷敬・從建・文楚・文會・師益・令真・志柔・義方・敬能・從諲・宗爽・清本・敬舒・智慧輪・僧伽提和・覺支の二八の名が記されている。なお、清瀾から志柔までの十五名の僧は「真身誌文」にもその名が記されている。

「鑿金單輪六環銅錫杖」には

僧弘志・僧海雲・僧智省・僧義真・僧玄依・僧志堅・僧志共・沙彌願思・弟子李甌薛氏父王惟忠母阿李為從實。

とあり、弘志・海雲・智省・義真・玄依・志堅・志共・願思(沙彌)の八名の名が記されている。

「銀函」には

上都大興善寺傳最上乘祖佛大教灌頂阿闍黎三藏苾芻智慧輪、敬造銀函壹重伍拾兩獻上、盛佛真身舍利、永為供養。殊勝功德、福資皇帝千秋萬歲。咸通拾貳年閏捌月拾伍日、造勾當僧教原、匠劉再榮鄧行集。

とあり、智慧輪と教原の二名の名が記されている。

「金函」には

敬造金函、盛佛真身。上資皇帝聖祚無疆、國安人泰、雨順風調、法界有情、同沾利樂。咸通十二年閏八月十日、傳教三藏僧智慧輪記。

とあり、智慧輪の名が記されている。

「真身寶函」には

大唐咸通十二年十月十六日、遺法弟子比丘智英、敬造真身舍利寶函、永為供養。

とあり、智英の名が記されている。

以上、法門寺埋納物に記された僧の名は、重複しているものを除いて僧澈・令真・清瀾・彦楚・惟應・重謙・雲顥・慧暉・清簡・可孚・懷敬・從建・文楚・文會・志柔・師益・澄依・弘照(尼)・智英・明肅(尼)・義方・敬能・從諲・宗奭・清本・敬舒・智慧輪・僧伽提和・覺支・弘志・海雲・智省・義真・玄依・志堅・志共・願思(沙彌)・教原の都合三十八名に上る。

### 三十八名の僧の出自と経歴

三十八名の僧の中で、既にその出自と経歴などが研究され、また認知されている僧には智慧輪・海雲・義真・僧澈(徹)の四名がいる。まず、智慧輪は『宋高僧伝』卷三の「満月伝」に簡略な伝が付されていることと、智証大師円珍の付法の師であることよって以前からさまざまな研究がなされていることは周知のとおりである。つぎに海雲と義真については、甲田宥咩氏が「恵果和尚以後の密教僧たち」(『高野山大学密教文化研究所紀要』一五号・三七〜八頁等を参照。二〇〇二年二月)と題した論考中に智慧輪とともに詳細な考察を行っている。最後に僧澈については、『全唐文補遺』(第一輯・一一頁上、三秦出版社、一九九四年)に「真身誌文」を収載して、それを撰述した僧澈を『宋高僧伝』卷六「東京兆大安國寺僧徹傳」(大正五〇・七四四下〜七四五上)の僧徹に同定し、伝の一部の引用をもって作者の経歴の説明にしている。しかし、言うまでもなく「真身誌文」の僧澈の「澈」の字は『宋高僧傳』では「徹」の字になっていることから別人の可能性も考えられるが、宋伝の中に「帝悅勅賜號、曰淨光大師。咸通十一年也。續録兩街僧事。」(大正五〇・七四五上)の一文から、「真身誌文」での僧澈の肩書中の賜号が同じく「淨光大師」であることと、伝の時期とは異なるが『大宋僧史略』卷中・左右街僧録の項に「大中八年。宣章公由首座充左街祖録。次淨光大師僧徹充右街僧録。」(大正五四・二四四上)とあり、僧録に充てられている経歴からも「真身誌文」の僧澈と『宋高僧傳』の僧徹は同一人物であることは確実のようである。なお、僧澈は伝記の内容から、当時の長安仏教界の指導的人物の一人であったことが知られる。以上が、これまで法門寺埋納物に記された僧に

ついて、その出自及び経歴等が考察され明らかにされている僧である。

では、残された三四名の僧の中で更に出自及び経歴等の明らかにし得る僧が存在するのかと言えば、いずれも断片的であることの憾みはあるが現時点で筆者の確認できた僧は、「真身誌文」に左右街僧録として上げられる清瀾・彦楚、首座として上げられる惟應、大師として上げられる從建・文會、「衣物帳」に主持真身院及隧道の任にあつた敬舒、「塗金単輪六環銅錫杖」供養者の一人である志堅の七名である。そこで、以下にそれぞれの僧について確認した資料を提示し若干の考察を加えてみよう。まず首座の惟應については、『冊府元龜』卷五一・帝王部・崇釈氏二の憲宗の元和十三年(八一八)の項に

十二月庚戌(一日)、僧惟應等辭赴鳳翔法門寺迎佛骨、命高品中使杜英琦監焉。

とあることから、惟應が元和十三・四年(八一八・九)から咸通十四・五年(八七三・四)の五十年以上にわたって、深く法門寺の佛骨迎送に関わつた僧であつたことが知られる。またこのことから、惟應が咸通十四年の時点で七五歳以上の高齡の僧であつたことも推測される。つぎに左右街僧録の清瀾と彦楚については、『大宋僧史略』卷中・左右街僧録(大正五四・二四四上)の項に

懿宗咸通十二年(八七二)十一月十四日、延慶節兩街僧道赴麟德殿講論。右街僧録彦楚、賜明徹大師。左街僧録清瀾、賜慧照大師。とあることから、清瀾・彦楚はともに僧録に充てられ賜号を贈られた僧澈と同じく、長安仏教界の指導的人物であつたことが知られる。なお、彦楚については補足すべき事柄があるが後述する。つぎに志堅については、『八瓊室金石補正』卷六六に北宗禪・普寂の弟子の法玩禪師の墓誌である「大唐東都敬愛寺故開法臨檀大德法玩禪師塔銘并序」に、弟子の一人として「敬愛寺開法志堅」とあるのが認められる。ただし、この塔銘は貞元七年(七九〇)の建立になることから、咸通十四年(八七三)に法門寺に施入されている志堅の名が刻された錫杖との時間の隔たりは、単純に考えるならば八十年以上にもなってしまう。たとえ同名であっても別人と言わざるを得ないということになるが、ただ志堅の名が刻された錫杖が法門寺に施入される以前に造られた物である場合には、「敬愛寺開法志堅」と同一の僧である可能性が出てくる。というのも、法門寺に埋納された錫杖は三柄存在するが、内二柄はその作行や刻銘から宮中の文思院で咸通十四年に製作されたものと考えられるが、問題の錫杖はそれとは別に造られた物のようであることが考えられ

るからである。その理由は、埋納された錫杖について「物帳碑」を見ると、宮中・文思院造の二柄の錫杖は「真身到内後相次賜到物一百二十二件、……錫杖一枝重六十兩、……真金鉢盂錫杖各一枚共重九兩三錢。」と確かに記されているが、問題の錫杖は記載されていないことである。このことは、この錫杖が咸通十五年以前にすでに法門寺に供養されていたものであったか、あるいは何らかの経緯を経て過去に宮廷の蔵となっており、その蔵品が咸通十五年に仏骨の供養物として法門寺に施入されたものではなかったかということ推測させる。いずれにせよ、この錫杖が、以上のことから咸通十五年以前に造られたことは確実ではなからうか。このような推測はまた、問題の錫杖には前述したように海雲と義真の名が刻されていることから裏付けられる可能性がある。ここに、海雲と義真の名が刻されていることが錫杖の別造と関係があると考えるのは、両僧の活動時期及び入寂時期に問題があると考えられるからである。まず海雲であるが、海雲には『阿密哩多軍吒利法』の撰述があり、その識語に「時以大唐長慶元年二月三十日於青龍寺東塔院比丘海雲記、奉阿闍梨教以記、他時并勘畢。」(大正二・七二)とあつて、長慶元年はすなわち八二一年であることから咸通十五年までは五十年以上の時間の隔たりが存在する。長慶元年の当時、海雲は比丘といふのであるから、少なくともその年齢は二十歳以上であることを考えると、前述した惟應の例があるものの、咸通十五年までの生存といふのは微妙であろう。ついで義真についても前述した甲田氏の論考に、関係資料の詳細な考察からその生存年代を七九〇年頃から八六〇年頃と推測されており、咸通十五年までの生存の可能性を考えると困難のようである。以上のことから考えて錫杖に刻名された志堅は「敬愛寺開法志堅」と同一人の可能性は存在すると言えらるであろう。なお、密教僧の海雲・義真と北宗禪の志堅が一つの供養物に名を列ねるといふことには、一見すると些か奇異の感を起こさせるものがあるが、唐代の密教は善無畏・金剛智・不空の時代の全般にわたって北宗禪の禪師と深く関わってきた歴史的事実が存在していることから考えれば、<sup>1)</sup> そのようなことのあるのは自然なことではある。最後に從建・文會・敬舒及び彦楚については、大中十一年(八五七)頃に建立されたと考えられる『大唐崇福寺故僧録靈晏墓誌并序』(『唐代墓誌彙編續集』一〇二二頁、上海古籍出版社、二〇〇一年)に靈晏の弟子として

入内弟子、令楚・賜紫身故・无著・義秀・從建・元迴・文籍・洪辨・文會・懷宇・惠直・元智・惠貞・少琮、已下三學弟子、智

玄・常清・敬舒・懷章・懷慶・少諍等、・・・

とあり、從建と文會が入内弟子として記され、敬舒が三學弟子として記されている。さらにはこの墓誌の撰者が「弟子内供奉講論兼應制引駕大德彦楚述」とあり、彦楚もまた靈晏の弟子であったことが知られるのである。靈晏にはまた、墓誌に記された経歴に注目すべき記述が二つ存在する。それは、一つには

首自憲宗達于大和、獻壽累朝、每悅天思。其年法門寺佛中指節骨出見、輔翼迎送、人望所推。

とあるもので、「其年」とはこの場合、憲宗・元和十四年（八一九）の法門寺仏骨の宮中供養を指すと考えられることから、靈晏はこの宮中供養に際して法門寺仏骨を「輔翼迎送」した僧であったということである。このことは、靈晏の墓誌には二十人の弟子が記されているが、その内四名もの弟子が、後に再び師と同じく法門寺の仏骨の迎送及び供養物の埋納の任に当たったというのは興味深いものがある。また一つには、

遂爲舊崇福寺翻經五部持念・翰林待詔・檢校鴻臚少卿・賜紫・廣濟和尚弟子。

というものであり、靈晏の師が廣濟という僧であったことが知られることである。ところで、この靈晏の師である廣濟の肩書の中には「翻經」という記述があり、このことから廣濟が何らかの經典の翻訳にかかわったことが知られるのであるが、それは一体どのような經典翻訳であったのであろうか。改めて弟子である靈晏の経歴を見ると、靈晏は宣宗の大中十年（八五六）に入寂しており、その時の年齢は不明ではあるものの徳宗の貞元十四年（七九八）に具足戒を受けているので、受戒時の年齢が二十歳前後と考えるならば、その出生年は大暦十三年（七七八）頃となり入寂時には七八歳前後の年齢となる。そして靈晏はその墓誌に「和尚童年入道、固願莫違。天然發心、永求剃落。」と記され、その直後に廣濟の弟子となったことが記されている。このことから、靈晏が受戒以前に廣濟のもとに弟子入りしていたのは確実なことから考えられるので、靈晏の受戒前後に行われた經典翻訳が何であったかが問題となるであろう。これを『貞元釈教目録』等に捜求するならば、その時期に行われたのは般若三蔵の訳経だけであることが知られる。そこで、廣濟の名を般若三蔵の訳経の席に列座した僧の名に求めたならば、奇しくも靈晏が受戒した年である貞元十四年の二月に、新たに進上なっ

た所謂『四十華嚴經』翻訳の訳語としてその名を見るのである。当時の肩書は「東都天宮寺沙門」(大正五五・八九五中)であり、『四十華嚴經』翻訳の訳語僧として、特に「頻使催促無譯語人。訪知東都有善語者」(大正五五・八九五上)の理由により、貞元十二年勅命をもって洛陽から長安に赴いたのである。以上によって靈晏の師である廣濟は、般若三藏の經典翻訳に参列した僧であることが明らかとなったのであるが、廣濟の肩書には更に「舊崇福寺」と「五部持念」という唐代密教史にとつて極めて重要な寺名と教理上の言葉が記されている。まず「崇福寺」は、不空の後継者である恵朗が住し、その付法の天竺阿闍梨も住した寺である。なお「崇福寺」に「舊」が付くのは、会昌の破仏のときに廢寺となり、破仏の後に復興されることなく、街西・義寧坊の化度寺の寺名が改められて崇福寺の寺名が付けられた為である。<sup>2)</sup> また洛陽・天宮寺僧の廣濟が崇福寺に居住することになった理由は定かではないが、『四十華嚴經』の訳場が当初の予定では西明寺であったのが「西明地遠來往艱難、應遂便宜取崇福寺。」(大正五五・八九五上)という理由によって崇福寺となったことが、廣濟の居住のきっかけとなったのかもしれない。つぎに「五部持念」は明らかに金剛頂經系の教法を指すのであって、この五部の教法を廣濟が誰から受法したのかは不明であるが、崇福寺居住ということがこの際重要な意味をもつかもれない。また廣濟の受法した金剛頂經系の教法が、弟子の靈晏にも受け継がれていたであろうことは、靈晏の墓誌に「乃命門人義秀等、令諷諸真言、一夕繼響。從暮至曉、聽而生敬。」と記されていることから窺われる。そしてこの教法が靈晏から弟子である彦楚・從建・文會・敬舒らに伝えられた可能性は十分に存在すると思われるならば、恵果以後の密教と法門寺埋納物中の密教法具等との関係を考える上で、何らかの示唆を与えるものと言えるのではなからうか。

以上、法門寺の埋納物に見られる僧の出自及び経歴等について、現在管見の及ぶ限りの調査と考察を試みたのであるが、関係すると思われる文献のすべてを精査したとは言いがたく、そのため多くの遺漏等もあるやに思われるが、それは今後の課題としたい。



注

(1) 密教と北宗禪との関係は、金剛智については『宋高僧傳』巻一「大智(義福) 大慧(一行) 二禪師、不空三藏、皆行弟子之禮焉。」(大正五〇・七一中)と記されることや、善無畏については拙稿「善無畏三藏の在唐中における活動について」(『東洋の思想と宗教』六号、一九八九年)、不空については拙稿「惠果和尚の最初の師とされる大照禪師について」(『印仏研』四六卷一号、一九九七年)を参照。

(2) 小野勝年『中国隋唐長安・寺院資料集成』「史料篇／休祥坊」の崇福寺・萬善尼寺・昭成尼寺の項の一七三頁下、及び「義寧坊」の化度寺の項の一九四上を参照。(一九八九・法蔵館)

(キーワード) 法門寺・僧澈・彦楚・清瀾・惟應・從建・文會・敬舒・志堅・靈晏・廣濟・唐代密教